

アメリカ英語における北部方言の 特 徴 に つ い て

武 本 昌 三

ま え が き

アメリカ英語の北部方言を理解するためには、われわれは先ず、1620年12月に Plymouth に上陸した Mayflower 号の102人に始まる移民の流れに眼を向けなければならない。

Pilgrim Fathers と呼ばれる 彼等英国からの移民は、最初の年の冬の間に、飢えや寒さで、すでに半数が死んでしまったけれども、その後次々に新しい移民を迎えて、Massachusetts 湾一帯は急速に発展していった。これら初期の移民達が使っていた英語こそ、アメリカにおける北部方言、ひいてはアメリカ英語そのものの根源である。

彼等はその約三分の二までが、イギリス南東部の、例えば Suffolk, Norfolk, Essex あたりの出身で、ほとんどが中流以下の階層の人達であったと言われている。このことはとりもなおさず、Massachusetts 一帯で17世紀に話されていた言語が、主としてイギリス南東部の、中流以下の人々の英語であることを意味するものにほかならない。

これらの移民達は、やがてその数を増すにつれて、Massachusetts 湾一帯の植民地から周辺に伸び、Main や Rhode Island, Connecticut 等の諸州にひろがっていった。このようにして、New England 全体の移民の総数は、1640年頃までに2万5千人に達していたという。

1775年から1783年にかけての独立戦争が終ってから、今度は彼等の子孫達がさらに発展を続けた。一方では Connecticut 州から New York 州を

経て New Jersey 州の東半分へ、他方では Massachusetts 州西部から New York 州北部及び Pennsylvania 州北部へと進出していったのである。これらすべての地域が今日、いわゆるアメリカ英語の中で、北部方言があらわれてくる領域であり舞台である。

それでは、この移民達の子孫が話す北部方言とは、どのような特徴を持つものか、一般のアメリカ英語とはどう異なるのか、それらを、語い、語法、及び発音の三つの角度から概観を試みるのが本稿の意図するところである。

1. 語 い

a. pail

「バケツ」は北部ではひろく一般的に *pail* と言われている。英語としても非常に古い言葉の一つで、OED の用例は1000年頃までにさかのぼる。DAE の用例では1622年からのものがあるが、その使用範囲はほとんど北部に限られていて、中部や南部で用いられている *bucket* に対しては方言的に⁽¹⁾明確な相違を示す。

Pail is the native term: milk pail, water pail, sap pail, dinner pail, lard pail, tin pail, wooden pail, a pail of water, berry pail, cherry pail.

Bucket is known mainly in the song 'The Old Oaken Bucket.'

—— [ADD]

勿論これは北部における用例であるが、南部でも例えば次のような用例が

(1) Wentworth, *American Dialect Dictionary*, p. 80 参照。ここで、この語に関してつけ加えられた Wentworth の次の note は注目に値する。

"The total absence of the word *pail* not only from the dial., but even from cultivated speech in the Southern & Border States until very recently, is a fact I leave to be explained on further investigation. The word is an old one and a good one, but I fancy that its use in England could not have been generally diffused in the 17th century"

残されていて興味深い。

A poor Yankee schoolmaster, that said pail instid [sic] of
bucket ... — [ibid]

もっとも「バケツ」は現代でこそ金属製でありプラスチックのものなども出てきているのであるが、上例の wooden pail やその他 cedar pail などといった合成語が示すように、もともと木製がすべてであった。このようなことから、例えば Narragansett 湾から New Brunswick にかけての北部海岸地帯のように、pail は金属製のバケツにのみ用い、木製の方には bucket を用いて区別していたところもあったようである。しかし少なくとも北部のその他の地域では、アメリカ革命の頃までに pail が優勢になり、bucket は影をひそめて今日に至っているということが出来るであろう。⁽²⁾

b. darning needle

「とんぼ」は dragon fly が用いられていないわけではないが、一般的には darning needle または devil's darning needle であって、これは北部全域にあてはまる。

イギリスにおける用例を調べてみると、地方語として devil's needle の形で 1871 年に用いられた次の記録があるのみで、darning needle, devil's darning needle の記録はなく、これらは明らかに Americanism である。

The swift approach of one of these glittering 'devil's needls'

— Staveley, *British Insects* [OED]

アメリカ語としての用例は、

Now and then, ... a devil's-darning-needle would pertinaciously
hover about our heads. — *Putnam's Monthly* (1854) [OED]

(2) Kurath, *A Word Geography of the Eastern United States*. pp. 12-13.

もっとも南部では逆に木製のバケツを pail として bucket と併用している例が少数ながら散見出来るようである。Kurath, *ibid*, Fig. 66 参照。

Darning-needle, the dragon-fly ; the devil's darning-needle.

— *Century Dictionary* (1889) [DAE]

この darning needle の分布状況は中部方言の snake feeder との間にかなり明確な isogloss で示すことが出来る⁽³⁾。例外的に、教養程度の高い Philadelphia 人の間でも用いられているが、これは New York 市よりの影響によるものであるらしい。このほかにも散発的にこの北部方言が用いられている地域として、Virginia の北部、Ohio 上部、West Virginia の南半分などがあげられるが、この中 West Virginia の場合は、恐らく New England 植民地との、過去における接触の名残りであろうという⁽⁴⁾。

c. angle worm

「みみず」は各地方毎に、earthworm, eass-worm, ees-worm, redworm, angle worm, angle dog, bait, dew-worm, eelworm, fishbait worm, fishing worm, fishworm, mudworm 等の呼名があって、方言としてはきわめて多彩である⁽⁵⁾。

この中、北部全域にわたって最も一般的に用いられているのが angle worm であるが、この語の場合、地域によって相違はあるにしても、むしろこの語だけが単独で用いられているのではないことに注意する必要がある。

angle worm は元来、イギリスの南西部の方言であったものが、移民と共にアメリカ北部に定着したもので、DAE には 1832 年以來の次のような用例が記録されている。

We have among us, in summer, a variety of native worms, ...
the Earthworm, the Brandling, the Angleworm.

— Williamson, *The History of the State of Maine*. (1832)

(3) Kurath, *ibid*, Fig. 5a 参照。

(4) Kurath, *ibid*, p. 75.

(5) これらの語の地域的分布状況及びその歴史的背景などについては Marckwardt, *American English*, pp. 144-145 にくわしい。

Flax seed was expressed and impressed in an oleaginous bag, whose slippery contents wriggled about on the tremulous lid like a packet of angle-worms.

— B. F. Taylor, *World on Wheels*. (1874)

Angle-worms and other bait are employed in the Delaware and Southern rivers.

— Roe, *Nature's Story* (1884)

The industrious robins rip elastic angle-worms from the sod.

— Flandrau, *Harvard Episodes* (1897)

He collected a small gourdful of angle-worms.

— *Everybody's Magazine* (1900)

Having no shortening they dug angle-worms and crushed them up with the acorns.

— G. Stuart, *On Frontier* (1918)

これらの中、第三の用例は明らかに angle worm が北部からはみ出していることを示している。一方、ADD で見ると、angleworm について例えば 1894 年の用例で、Connecticut 州西部では angleworm 以外の語は知られていないとある。結局、Kurath の言語地図を見ても明らかなように、より厳密には、Angle worm という最も一般化した呼名が北部にはあって、そしてそのほかに、fish worm, earthworm, mud worm のような地域語が angle worm と併存しているというべきなのであろう。

d. johnnycake

トウモロコシの粉に、ミルク、卵、水を加えて焼いた「トウモロコシパン」は普通アメリカ語で corn bread であるが、北部全域、特に New England 地方では johnnycake でほとんど例外なく統一されている。DAE には 1739 年からの用例があり、1805 年の用例には、johnnycake が下流階層の食物であることを匂わせた、次のような説明がある。

The lower class of people mix the flour ... with water, make

a sort of paste, and lay it before the fire, on a board or shingle, to bake, and generally eat it hot, as it is but very indifferent when cold. This is called a Johnny cake. — Parkinson, *Tour*

この語の起原については Mathew の Dictionary of Americanisms の記述⁽⁶⁾をはじめ、諸説紛々としていてつまびらかでない。Shawnee Indian がこのようなものを作ったので、Shawneecake から変わってきたという説。このパンを持って長い旅に出たので journey cake といったのがもとだとする説⁽⁷⁾。あるいはまた、昔イギリス本国やスコットランドの田舎で、めの粗い小麦で焼いた小さなパンを jannock, johnick, johnick bread などといったことから、それらがアメリカでトウモロコシを材料にするようになってからは、jonakin, jonikin⁽⁸⁾, johny bread, johny cake, journey cake となり、これらの中で johnny cake が一般化したという説。結局いずれであるかは確定出来ないのであるが、北部方言の成立過程から考えても、恐らく最後の説に最も真びょう性があるように思われる。

今日でも jonikin (johnnikin) は南北 Carolina の東部や、Maryland の東海岸では方言として用いられている。しかし、次の例のように、land of johnnycake といえば New England のことを示し、口語で johnnycake といえば New England 人をあらわすように、johnnycake は New England を中心とした典型的な北部方言の一つである。

This was the mystery connected with his visit to the land of johnnycake and wooden nutmegs. — Lowell Offering [DAE]

(6) "The origin of this term is obscure. The EDD records *Johnnycake*, a noodle or simpleton, but it is not easy to see any connection between this dial. expression and *johnnycake*. Any relationship with journey cake q.v. is likewise difficult to ascertain. The earlier and now obs. *jonakin* q.v. may account for the first element in *johnnycake* but no real evidence for this is available." Mathews, *A Dictionary of Americanisms*, p. 911.

(7) cf. "A kind of thin cake, made of Indian meal. Perhaps from *journey cake*." [ADD]

(8) "Of obscure origin. Possibly the original form of *Johnnycake*." [DAE]

Down Easters and Johnny Cakes can follow if they please. I an't a Johnny Cake, I an't. I am from the brown forests of the Mississippi, I am.

— Dickens, *American Notes for General Circulation* [DAE]

e. spider

「フライパン」をあらわす語は, frying-pan, frypan のほか, skillet, spider, creeper があり, 北部方言としては spider がひろく用いられている。

DAE では spider は “An iron frying pan or skillet, sometimes provided with long legs” となっているが, その 1790 年の用例では, “William Robinson, Junr ... Hath for Sale ... bake pans, spiders, skillets.” があり, 少なくともこの頃までは spider と skillet は明らかに区別されて用いられていた。

試みに OED で調べてみると, skillet は 1403 年にイギリスではじめて用いられた記録があり, その当時は, 水を沸かしたり, 肉を煮たりするための長い柄のついた stew-pan のような容器のことであって, これがアメリカに渡ってからは, 一般の「フライパン」をあらわす中部方言になった。現在でもまだこの語は, イギリス英語の方言の中にも残されている。⁽⁹⁾

spider の方は恐らくは New England の植民地あたりで造られた語で, もともと炭火の上などにおいて煮焚きするのに便利のように長い三本足と柄⁽¹⁰⁾

(9) 例えば Somersetshire 西部では, 次のように理解されている。

“A peculiar and distinctly shaped brass saucepan. It is cast, not beaten metal, a semi-globe in form, having three short straight legs of about three inches in length, cast on its bottom. The handle is tapering, but flat and quite straight, of greater length than that of common saucepans. It is cast in the same piece as the vessel, and in a line with the diameter. The skillet is only suitable to be used with a wood fire on the hearth.” [EDD]

(10) Tucker も spider を three-legged frying pan とし “real Americanisms” の中に加えている。

Tucker, *American English*, p. 303.

のついた鑄鉄のなべのことであった。これが New England を中心とする北部一帯と、さらに南部の沿岸地方でいつの間にか「フライパン」の意味で用いられるようになってしまったらしい。⁽¹¹⁾初期の植民者達が、いわゆる「フライパン」と spider を混同して使用していた名残りであると思われる。ADD における 1890 年代の次の用例は、その頃までにすでに、これらの語が方言として用いられていたことを示している。

It struck us [in n. e. cent. Indiana] as queer that a New York family said ... spider ... for what we called ... skillet.

f. brook

「小川」を brook というのも北部方言の特徴である。アメリカ各地で用いられている語は、この brook のほか、run, creek などがあるが、これらは地域によって次のように使われている。

In some parts of America, *run* is used in a like sense; but *run* is also applied to larger streams than *brook*. [DAE] (1828)

The *kill* of New York is a *brook* in New England, a *run* in Virginia, and alas! a *crick*, or *creek*, almost everywhere else. [DAE] (1871)

Brook is likewise absent [from the ancient Hoosier folk-speech]. The illit. Ind. countryman before the Civil War, let us say, had no pails, pared no apples, husked no corn, crossed no brooks. The same is true, I believe, of the South generally ... *Brook* was probably lost in the first generation.

—— Eggleston, *The Hoosier Schoolmaster* [ADD]

(11) しかし frying pan が都会における用語として、ますますひろがっていく傾向があるのに対して、spider や skillet は地域語としてその使用範囲をせばめつつある、と Marckwardt 教授はいう。

Marckwardt, *ibid.*, pp. 145-146.

West of New York everything that runs is a 'creek.' Brook, as a spoken word, is gone.

— G. H. Palmer, *Alice F. Palmer* [DAE] (1908)

Kurath の言語地図を見ると、brook の分布状況は、New England, New York 州, Pennsylvania 北部の中、特に New England に集中的に現われていることがわかる。Hudson 川と Delaware 川流域には若干 kill が見られるが、これはオランダ植民地の影響で、オランダ語の kill がそのまま残ったものであろう。⁽¹²⁾ しかし上の用例にも見られるように、New York 州や北部でも内陸地帯に入っていくと creek や run が目立ってくる。

結局、Krapp も “The earlier meaning of *creek* as a branch of the sea has been generally extended in America to mean a small fresh-water stream, though this use is not yet very common in New England, where such streams are usually calleed ⁽¹³⁾ brooks.” と言っているように、creek が北部にも New England を除いて浸透して来ている状況では、より厳密な意味で、brook は北部方言というよりも、New England 方言というべきなのかも知れない。

g. whiffletree

「荷車や馬車の遊動棒」を北部では whiffletree または whippetree とい⁽¹⁴⁾い、DAE にはそれぞれ、1841 年、1819 年からその用例がある。

Our whiffle-tree became detached from the vehicle, and fell upon the horse's heels.

— Hawes, W. P. *Sporting Scenes and Sundry Sketches*. (a 1841)

(12) この場合、通常 *Batten Kill*, *Peekskill*, *Catskill Creek*, *Schuylkill River* のように、固有名詞にその名残りを留めているだけである。

(13) Krapp, *The English Language in America*, Vol. 1, p. 85.

(14) whiffletree は、例えば whiffet が whippet の variation であるのと同様に whippetree の variation である。[DOA]

The tongue and whiffle-tree of a wagon was shivered to pieces.

— *Plough Boy, and Journal of the Board of Agriculture*. (1819)

Kurath の言語地図では whiffletree は New England, Hudson Valley 及び East Jersey で多く用いられ, whippetree の方は, New York 州中央部と Pennsylvania 北西部等で一般化している。そして, これらの使用範囲を isogloss で示すと, New Jersey から Ohio にかけて, 中部方言の singletree または swingletree との間にきわめて明確な一線で識別出来るようである。

この whiffletree または whippetree が, このように北部で集中的に用いられる傾向があるのは興味深い。OED を見ると, その用例は 1733 年にまでさかのぼり, whip から来た語であることが示されている。アメリカにおける記録では, DAE では 1819 年以降で, 1841 年からの singletree に比べれば若干早い。一方, EDD でも, whip からの派生語として whipple-tree をあげており, Cornwall の方言であるという。1700 年頃までの New England の住民の三分の二以上はイギリス南部の出身者であったということからも, whip から派生した whipple-tree というイギリス Cornwall の方言が, 移民とともに New England を中心とする北部に定着して, 文明社会の発展から取残されていくべきこの語の性格上, 拡散して用いられることもなく, 今日に至ったと見る事が出来るのではないだろうか。

2. 語 法

a. hadn't ought

ought not の意味で hadn't ought が北部ではひろく用いられている。試みにイギリスにおける ought の用法を EDD で調べてみると, do, have, shall の過去形と共に, 次のように方言として用いられていたことが示されている。

(Nottinghamshire 及び Lincolnshire)

I shouldn't have ought to ha' dun it.

(Leicestershire)

I did ought to ha' thought o' that.

(Sussex)

He didn't ought to.

この hadn't ought については OED にも, "Did you do that? You hadn't ought." という 1470 年の用例があるが, これがイギリス南部の方言として残り, 移民とともにアメリカ北部にもたらされて定着したものと考えてよいであろう。

Atwood の調査では, 北部のほか, Ohio 州南部と North Carolina の北東部のそれぞれごく一部でも hadn't ought の用例を記録しているが, 全体的に見て, やはりこれは典型的な北部方言である。ADD の用例にもこのことを裏づけるものが多い。次はその中の一例である。

but we [Southerners] are less apt than our Northern neighbors
to find 'we hadn't ought to went.' 'I guess I hadn't ought to
did it' [ADD]

文学作品中の用例としては,

"We've all done a bunch of things that we *hadn't ought to*.

— Lewis: *Babbitt* [CAU]

A man who would come knocking on a neighbor's door at
mealtime *hadn't ought to* be listened to.

— Caldwell, *The Midwinter Guest*.

肯定の had ought は hadn't ought とともに北部方言ではあるが, 用いられることが少なく, 無教育者の間のみに限定される。

What had I ought to (=should I) give them?

— Hemingway, *Macomber*

b. *sick to the stomach*

「はき気がする」を意味する *sick to the stomach* は北部方言で、中部、特に Pennsylvania 東部で多く用いられている *sick on the stomach*⁽¹⁵⁾、及び Pennsylvania 南西部と、中部の海岸地帯に散在する *sick in the stomach* とは区別される。

OED でこの用法を調べてみると、例えば *in* または *at* についてはかなり古く、1653 年から 1831 年までのものがあるが、現在では *obsolete* であるという。

The Dog, when he is *sick at the stomach*, knows Cure, falls to his Grass, vomits, and is well. [OED] (1653)

Sick in my stomach all the Morning — Owing to their hard Food. [OED] (1753)

前置詞の *at* を *to* で代用するのはイギリス英語の方言的用法であるが、⁽¹⁶⁾これがアメリカ英語の北部方言で *sick to the stomach* となって受継がれているものであろう。アメリカにおける用例は、次の 1830 年のものが最も古い。

Rum, if they take tu much of it, makes folks *sick to the stomach*. [DAE]

c. (he isn't) *to home*

この語法は北部方言として、特に New England の田園地帯、New York 州の中心部、それに Susquehanna 上部などでひろく用いられている。ただ

(15) Kurath は、これをドイツ語の *etwas auf dem Magen haben* や、イギリス英語自体の *to have something on the stomach* から影響されたものであろうという。Kurath, *ibid.*, p. 78, なお中部地方では *sick on the stomach* のほかに、*sick at*, *sick from*, *sick with*, *sick in* 等の使用も散見出来る。

(16) 例えば使用頻度は高くはないが、*all at once* を *all to once* といったりするものも北部方言である。

し、北部内陸地方ではすたれつつあるようであり、一般に教育程度の高い人々の間では用いられることはない。

前述の sick to the stomach のように、大体北部地方では、前置詞 at の代りに to を用いる傾向があるので、この場合も at home が to home となったものである。⁽¹⁷⁾

この to=at について、イギリスにおける用例を調べてみると、方言的に、しかも特に地名の前に用いられるとして EDD がいろいろ用例をあげている。その中、to home に関するものを次に示してみよう。

(Derbyshire)

I'm main sorry as Master Broom ain't to home.

... I'd a message for him.

— Lady F. P. Verney, *Stone Edge* (1868)

(Oxfordshire)

Thy waife and children to home.

— R. D. Blackmore, *Cripps, the Carrier* (1876)

一方 OED によれば、今日では方言か、アメリカ口語のみに残っているとして to home については次の例をあげている。

I guess, said he, they have enough of it to home.

— Thomas C. Haliburton, *The Clockmaker* (1835).

しかしながらアメリカにおける記録は逆にこれらより早く、DAE では 1795 年にまでさかのぼる。

Improprieties, commonly called Vulgarisms, ... [include] To home for At home.

(17) これについて Mencken は次のようにいう。

“Pickering also discussed the American use of *to* instead of the English *at* or *in* in such phrases as ‘I have been *to* Philadelphia.’ Witherspoon had denounced this practice in 1781, but it had survived, and in the vulgar speech it had produced such forms as *to home*.”

Mencken, *The American Language*, Suppl. 1, p. 92.

— Benjamin Dearborn, *The Columbian Grammar* (1795)

When he's to home ... he's a match for gab with any body't
ever you come across.

— John Neal, *The Down-Easter*. (1833)

Well! I thought I could stay — but you see, our folks wants
me to hum and so I've got to go!

— Caroline M. Kirkland, *Forest Life*. (1842)

さらに ADD では Massachusetts 東部における 1850 年の用例のほか、古
いものでは 1861 年の次の二例があつて、いずれも New England の記録で
ある。

She'd rather ha' staid t' home.

— Oliver Wendell Holms, *Elsie Venner*.

There ain't a soul but me to home.

— Mary E. Freeman, *A New England Nun & Other Stories*

d. dove (dive の過去形)

dive の過去形に dived を用いるのは北部では非常に少なく、⁽¹⁸⁾ 教育程度の
高い人々をも含めて dove が一般に用いられている。Atwood の言語地図を
見てもわかるように、むしろ dove の使用地域は北部からはみ出し、疑いも
なく南部及び西部へ波及しつつあるという。⁽¹⁹⁾

イギリスにおける方言的用法としては, dave, deave, deaved, div, divet,
doved などと数が多いが, dove の例も次に示すようにないわけではない。

(18) "Dived is uncommon throughout New England, New York, northern
Philadelphia, and eastern New Jersey; in this whole territory it is used
by less than one of 15 of the informants, without distinction as to type
(about one eighth of the cultured informants in New England use it)."

Atwood, E. Bagby, *A Survey of Verb Forms in the Eastern United States*,
Univ. of Michigan Press, 1953, p. 9.

(19) Atwood, *ibid.*, p. 9 及び Fig. 6 参照。

(Worcestershire) 'E dove into the wauter. [EDD]

(Lancashire) I will not say I never heard 'dove,' as 'he dove in for it,' but you would ten times oftener hear people say 'he dived in for it.' [EDD]

このように dove を用いる傾向は、明らかに drive と drove, ride と rode などとの analogy によるものであるが、このような用法の傾向は、イギリス英語に比べてアメリカ英語の方がはるかに強く、Theodore Roosevelt も子供達に宛てた手紙の中で次のように dove を用いていた記録がある。

"I was standing up at the time and the shock pitched me forward, so that I dove right through the window."⁽²⁰⁾

その他の用例としては、

And late one afternoon an Italian ... dove right down into the midst of a hundred ships.

— Ernie Pyle, *Brave Men* [CAU]

He rushed to the water's edge and dove toward the place where the two had disappeared from view.

— L. F. Stryker, *Andrew Johnson* [MAU]

e. see (=saw)

see の過去形に see を用いる例は New England で最も多く見られる。Atwood の調査では、この形は特に New England 南部で古くから用いられており、New England の北部または北東部では教育程度の低い人々の間でのみ使用頻度が高い。⁽²¹⁾

(20) Horwill, *A Dictionary of Modern American Usage*, p. 110, なお Krapp も Roosevelt の *Hunting the Grisly* から "The little animal ... dove into the bushes." をあげ、dove は glide の過去形に glode を用いるようにきわめて一般的な用法であるといっている。

Krapp, G. P., *The English Language in America*, Vol II, p. 257.

(21) Atwood, *ibid*, p. 20.

言語地図の分布状況から、一応北部独特の方言と考えてよさそうであるが、例外的に、Virginia の沿岸地帯及び North Carolina の一部などでも散見出来る。ただしこれらの地域では、seen, seed などと併用されていて、教育程度の低い人々の間だけに限られているようである。⁽²²⁾ ADD には Illinois 州南部の 1902 年の用例として、see と seen を次のように使いわけていることを示しているが、これはどの程度まで一般化されているものであろうか。

See is used for more immediate, *seen* for more remote past actions: 'Wasn that John th't just now passed?' 'I never see him!' But 'John was there all the time, but I never seen him.'

— [ADD]

イギリス方言では see の過去形は see, seen, seed などのほか数多くあって複雑多岐にわたっている。see については次のような例が EDD に記録されているが、恐らくその使用頻度は高いものではないであろう。

(Suffolk) The beautiful lady you ever see.

(Essex, Sussex 等) I see you coming up the path.

アメリカでは、Massachusetts, New England 等で次のような用例がある。

He see a cruetin Sarjunt.

— Lowell 'Letter.'

I see he was ... ready to fight.

— Elizabeth M. Roberts, *The Time of Man*.

Fine a gal's I ever see!

— Edna Ferber, *Show Boat*.

f. clim (=climed)

climb の過去形はアメリカでは方言的に、clum, clumb, clim, clomb などが用いられている。この中、Cape Cod を除く New England, Hudson

(22) Bryant, *Current American Usage*, pp. 179-180.

Valley 低部を除いた New York 州及び Pennsylvania の北端などの地域で clim [klɪm] の使用頻度が特に高く、中部との境界線附近では、clum が併用されているようである。

北部以外の地域では Chesapeake 湾周辺、Virginia の一部と North Carolina の北東部が clim の使用地域に入っているが、一応これは北部方言と考えてよいであろう。New England 北東部や南部などで rise の過去形を riz というように、[ai] → [ɪ] の pattern に従ったものと考えられるが、イギリス英語では方言においてもこの形式はなく、従ってこれはアメリカ英語独特のもので、しかも徐々にすたれつつある用法である。⁽²³⁾

ADD にあげられた用例のうち、その使用地域と年代をあげれば、次のようになる。

(New England) Clum and clim are common, at least as preterits. (1890)

(New England) [klɪm], [klʌm] are common. (1892)

(Connecticut 西部) Clim perhaps commoner than clum. Typical elderly rural. (1893)

(North Carolina 西部及び Tennessee 東部) The bear clim a tree. (1904)

(Kentucky 北東部) the hills these old legs has clim' 10,000 times over ... I clim to the top ... clumb. (1937)

3. 発音

北部方言としての発音の特徴は、すでに見てきた、語い、語法における特徴に比べれば一層流動的で捉え難い。いろいろ例外もあり異論があつて、結局ここでは最大公約数的なものを浮きぼりにさせることだけで満足するほか

(23) Bryant, *ibid*, p. 53.

はない。便宜上発音に関しては、北部を次の通り三つの地域に分けてとりあげることにする。

a. New England 東部

この地方で先ず目立つのは [r] の発音である。barn, beard, four, Thursday, horse, father などの [r] は発音されず、この点では イギリス英語の発音に近い。ただし、[r] が母音の前にきて linking [r] となる時には [r] の発音は残され、far away は [far əwe] となり、better and better は [bɛtə ən bɛtə] となる。law が [lɔr] となり、ideas が [aɪdiəz] となるように、しばしば intrusive [r] が入ることもある。

afternoon, glass, bath, France などの [ɑ] は多くの場合 [a] と発音される。barn, yard などの場合には例外なく [a] である。[ɑ] の発音は普通、log, mock, gong, honk, donkey 等において用いられる。

二重母音の [aɪ], [ɔɪ], [aʊ] については、比較的統一された発音の仕方が見られる。tune, due, news などの語については、ときおり [ju] の発音が見られ、absorb, blouse, greasy には [z] が用いられることも少なくない。

b. 北部内陸地方

horse, four, father 等の語における母音のあとの [r] は発音される。

on, hog, fog, frog の o は [ɑ] と発音される。ただし、dog, log は [ɑ] とならない。

Tuesday, due, new, music, beautiful などの語の発音には、普通 [iʊ] が用いられる。

c. New York 市附近

[r] 音は母音の前に来る場合を除いて発音されず、例えば far, farm 等は [fa:], [fa:m] となる。

foreign, orange, borrow, on, hog, frog, fog, log 等の語の o はすべて [ɑ] と発音される。ただし dog は例外である。

far away は [far əwe] となり, better and better は [betə ən betə] となって linking [ə] が生ずる。law が [lɔr] となり, ideas が [aɪdiəz] となって, intrusive [r] が入るのも, New England の場合と同様である。

mourning と morning, hoarse と horse 等の発音上の区別はつかない。wheelbarrow などの語では [hw] の代りに常に [w] が用いられる。

May, dairy において, [e] の発音を用いる。

four と for はどちらも [fɔə] が普通で, 時には [fɔr] も聞かれる。

ask, dance, path の場合は [æ] が用いられるが, bad, land, thanks などの場合のように, [ɑ] が用いられることもあるので, この [ɑ] と [æ] については, New England 東部におけるようなはっきりした区別はない。

nice, time などにおける二重母音は [aɪ] と発音されるが, [ɑɪ] の発音も珍らしくはない。tune, due, news については, ときどき [ju] が聞かれる。absorb, blouse, greasy の場合もときどき [z] が用いられているようである。

参 考 文 献

(項目の末尾の [] 内は本文中に使用した略号)

Craigie et al, *A Dictionary of American English*, Chicago, Univ. of Chicago Press, 1965. [DAE]

Murray et al, *The Oxford English Dictionary*, Oxford, Univ. Press, 1933. [OED]

Mathews, M.M., *A Dictionary of Americanisms on Historical Principles*, Chicago, Univ. of Chicago Press, 1966. [DOA]

Wentworth, H., *American Dialect Dictionary*, New York, Thomas Y. Crowell Co., 1944. [ADD]

Wright, J., *The English Dialect Dictionary*, London, The Times Book Club, 1898. [EDD]

- Evans & Evans, *A Dictionary of Contemporary American Usage*, New York, Random House, 1957.
- Guralnic et al, *Webster's New World Dictionary of the American Language*, New York, The World Publishing Co., 1951.
- Horwill, H. W., *A Dictionary of Modern American Usage*, Oxford, University Press, 1944. [MAU]
- Fowler, H. W., *A Dictionary of Modern English Usage*, Oxford, University Press, 1965.
- Nicholson, M., *A Dictionary of American English Usage*, New York, The New American Library of World Literature, Inc., 1958.
- Whitford & Foster, *Concise Dictionary of American Grammar and Usage*, New York, Philosophical Library, Inc., 1955.
- Kurath, H., *A Word Geography of the Eastern United States*, Ann Arbor, Univ. of Michigan Press 1966.
- Atwood, B., *A Survey of Verb Forms in the Eastern United States*, Ann Arbor, Univ. of Michigan Press, 1953.
- McDavid, R. I., "American English Dialects," *The Structure of American English*, New York, Ronald Press Co., 1956.
- Mencken, H. L., *The American Language*, 4th ed. New York, Alfred A. Knopf, 1957.
- Mencken, H. L., *The American Language*, Supplement I & Supplement II, New York, Alfred A. Knopf, 1956.
- Krapp, G. P., *The English Language in America*, New York, Century Co., 1952.
- Pyles, T., *Words and Ways of American English*, New York, Random House, 1952.
- Marckwardt, A. H., *American English*, New York, Oxford University Press, 1958.
- Tucker, G. M., *American English*, New York, Alfred, A. Knopf, 1921.
- Kerr & Aderman, *Aspects of American English*, New York, Harcourt, Brace & World, Inc., 1963.
- Hook & Mathews, *Modern American Grammar and Usage*, New York, Ronald Press Co., 1956.
- Bryant, M. M., *Current American Usage*, New York, Funk & Wagnalls Co., 1962. [CAU]

Thomas, C. K., *An Introduction to the Phonetics of American English*, New York, The Ronald Press Co., 1947.

Bronstein, A. J., *The Pronunciation of American English*, New York, Appleton-Century-Crofts, Inc., 1960.

小西友七 「前置詞」(英文法シリーズ) 研究社, 1956。

空西哲郎 「動詞」(英文法シリーズ) 研究社, 1956。

尾上政次 「現代米語文法」研究社, 1957。

豊田 実 「アメリカ英語とその文体」研究社, 1965。

武本昌三 “アメリカ英語における方言の研究” 室蘭工業大学研究報告, 第5巻第2号, 1966。

武本昌三 “アメリカ英語における方言的語法について” 室蘭工業大学研究報告(文科編), 第6巻第1号, 1967。

